
アルファー

超クリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルファー

【Nコード】

N8269T

【作者名】

超クリス

【あらすじ】

「…………た…………す…………け…………て…………」

突然響いた助けを呼ぶ声、その時は結局正体が分からなかったが、その声を聞いた日を境に主人公 クラウスの世界が少しずつ変化していく。

またその影で最強の戦士と呼ばれる《十柱》が不穏な動きを見せる。

剣と魔法が繰り広げるVRMMORPGが今始まる……

ブローグ

俺は眼前に迫る獣爪を、身体を逸らして避けた。

しかし完全に避けきることができず頬を浅く掠め俺のHPバーが僅かに減った。

避けると同時に右手に握りしめた剣を、反射的に薙ぎ払う。

「っらあ！」

「グオオア！！」

パット赤い液体が水平に飛び散り、それと同時に右上に表示されている敵のHPバーが3分の1減少する。

野太い悲鳴が迷宮の空気を震わせ、怒り狂った魔獣は滅茶苦茶に両手を振り回して襲いかかってくる。

88階層に出現する四手熊 レベル153の《グリズリーマザー》だ。

俺は頬を流れる仮想の血を舐めると、さらに後ろに距離を取って剣を構え直す。

肩に担ぐように切っ先を四手熊に向け、両手で剣を握り前傾していく。

「はっ！！！」

俺の気合いに呼応するように剣の周りを炎が覆う。

バースト・ステインガー
片手剣属性攻撃技が四手熊の心臓があるであろう場所を貫いて、
焼き焦がした。

「グオオオオ!!」

HPが0になるとともに四手熊の断末魔が耳を刺す。

体重500キロを越すであろう四手熊は、空間に染みるように輪郭を崩して消えると、琥珀色の魔力結晶になった。

キィ……ンと澄んだ音を立てて魔力結晶が落ちると同時に、俺は膝を折って頭を押さえた。

四手熊を倒した瞬間、EXPと呼ばれるエネルギーが流れ込んだのだ。

他の存在のエネルギー奪う、食事にも似たプロセスに苦痛はない……むしろ、陶醉に似た快感を得る。

それが、俺にとっては頭痛がするほどの苦痛だった。

「いい加減にしろよ」

自分に言い聞かせるように呟やいた俺は立ち上がって、落ちていた魔力結晶を拾いあげる。

「土属性か……」

魔力結晶の色は、それぞれの属性を表している。

火であればルビーに

風であればエメラルドに

土であればトパーズに

水であればサファイアに

闇であればアメジストに

光であればダイヤモンドに

其々の属性が混じりあうと複雑な色に染まり、純度と光度の高い結晶ほど、内包したエネルギー総量が高い。

また、大きさや色の具合で、取引値段が変わり、下の階層に棲む強力な魔獣ほど、美しく大量の魔力結晶を入手できるのだ。

俺は結晶をポーチに入れると新たな獲物を求めて迷宮の奥に足を進めた……

《アルファ》それは、魔法や剣技を駆使して無数の魔獣が湧き出す底無しとまで言われる迷宮を攻略していき、また対人戦闘によってランキングを上げていくというVRMMORPGであり、それは発売当初から絶大な人気を誇った。

俺もその人気の渦に巻き込まれるような形で買った1人である。

しかし、発売されてから3年間未だに最下層に辿り着いた者はおらず、ランキングでも1位から10位のプレイヤーはその地位に君臨し続けているため《十柱》とまで呼ばれるようになっていた……

蛇足だが俺は605位でレベルは498である。

その後、オーガやミノタウロスを倒した俺は連戦の疲れで壁を背に半ば崩れるようにして座り込んだ。

「はあ、はあ……さすがに疲れたな……」

作られた世界でありながらも、疲れ・眠気・食欲・尿意等がリアルに感じるのである。

「……………帰るか」

壁を支えに立ち上がろうとした瞬間それは聞こえた。

『……………すけ……………』

「ん？」

一瞬、空耳かと思ったがこの世界においてそんなものはないと思
い出す。

『……た……す……け……て……』

二回目のは確かに聞き取れたが何処から聞こえてくるかが分からない。むしろこれは直接頭に話しかけられているようだった。

「つく！何処だ、何処にいる！」

俺の叫びが迷宮には響き渡る。

『わたしは……底に……い……る……』

先程より今度のは、はっきりと聞こえたが、言葉の意味が分からなかった。

(底だと？最下層の事か？)

色々な疑問が頭を飛び交うが当然答えは浮かばなかった。

そして、何時の間にかあの謎の声は聞こえなくなっていた。

「なんだったんだ、今の……」

結局声の主が分からなかった俺は釈然としないまま、出口へと足を向けた……

プロローグ（後書き）

色々と文を間違っているかもしれませんが、評価お願いします。

戦いの幕開け（前書き）

今回は自分的には長めに書いたつもりです。
どうぞ御拝見下さい。

戦いの幕開け

茫漠たる闇の連なり。

何も知らぬ者がこの場所を目にすれば、おそらくそう感じるだろう。

だが違う……

目を凝らすまでもなく、むしろ闇を際立たせるためとしか思えぬ明かりが、あちらに1つ、こちらに1つ、にじんでいるのが分かるだろう。

そして、部屋の中心にはある円卓を囲んでいる9つの影があった。

《アルファ》の中で最強と呼ばれる戦士達《十柱》である。

と

「皆さん今日は集まっていたいただきありがとうございます。今日集まっていたいたいたのは他でもなく《彼》のことです」

1人の影はマントとフードに身を包んだまま立ち上がり、口の端に笑みを浮かべながら周りの影に向けて声を発した。

「そろそろ動きを始めるとしましょう。手段は選びません。どんな手を使ってでも構いません。皆さんの活躍期待していますよ」

大袈裟に両手を広げた男の声と共に先程までいた周りの影は跡形

もきえていた。

「クツ……クツクツクツ……あなたの時代はもう終わりです」

そう言つとフードの男も周りにいた影と同様に消えていた……

……

迷宮から帰つたクラウスはその足で馴染みの店に向かった。

「よう、ホリイ相変わらずだな」

軽く手を上げながら店に近づいていくとホリイも「あんたもね」と答えてくれた。

彼女はバトル系のVRMMOでは珍しい女性プレイヤーで、素材や魔力結晶の換金や武器の鍛練、アイテムの販売と幅広く商売をしている《何でも屋》である。

また、その美貌で数々のプレイヤーから声をかけられまくっているが、いずれも相手にせず1人で店を切り盛りしている。

「魔力結晶の換金を頼む」

そう言つとクラウスは今日手に入れた必要のない魔力結晶だけを取り出してカウンターに置いた。

しかし、ホリイは営業スマイルだった顔を急にひきつらせるとカウンターの後で後ずさりながらクラウスの背後をちよいちよいと指

ちなみにクラウスは魔法と剣技が使える《魔剣士》でブランの《重剣士》は攻撃力と防御力が秀でたものである。

ブランは、とある日クラウスに対人戦で負けた日から、クラウスを「永遠のライバルだ」と言い始め、よく決闘を申し込んでくるのである。

「……いや、遠慮しときます」

毎回の事なのでここは丁重にお断りした。

しかし、そんな事では納得しないブランは……

「な、なぬう、生涯の宿敵、このブランの決闘を受けないだど!？」

「いや、勝手に言われても……あと今日は疲れているからパスなわけ」

一瞬だけ挫けたかのように見えた男　ブランだったが、クラウスの言葉を聞くと、すぐに立ち直りついさっきと同じ調子で、ビシッとクラウスに指を突きつけてくる。

「むっ……ならば仕方ないまた次の機会にするとしよう」

そう言うとブランはクラウスに背を向けて歩き出した。

彼が見えなくなると、先程までカウンター影に隠れていたホリイがようやく顔を出した。

「ふう……ようやく行つたか……私、ブランのような暑苦しい人苦手なのよぬ」

ホリイはそう言うところから魔法結晶の鑑定を始める。

「まあ実力は確かだけどな」

事実、レベルまでは分からないがブランのランクは俺より上のランクのプレイヤーを倒しているため上である。ただ俺が理由をつけてはブランの決闘を断っているだけである。

「そつといえばクラウドス、あなた近々ある代表戦出るの？」

《アルファ》という世界は幾つかの都市に別れて存在しており二、三ヶ月に一度その都市どおしで10人代表を出しあつて団体戦で戦い、優勝したら高額のセル（ここでは金を意味する）とレアなアイテムが送られるのである。

「ん〜どうしようかな、取り敢えず出るだけ出てみようかな〜」

ホリイから換金したセルを受け取りながら答える。

「取り敢えず俺もそろそろクラスチェンジしとくかな」

ホリイに別れの挨拶を済まし、クラスチェンジするため転生の神殿に向かった……

都市には、一際目立つ建物が3つある。

ギルド協会本部、闘技場、そして転生の神殿だ。

半球状の神殿の内部は、奇妙な程にシンプルに作られており、紋章と魔法文字が敷き詰められた回廊を歩む者は、資格を問われながら転生の間へと誘導される。

レベルが足りなかったりした者は扉に阻まれ、外へと弾き出される。

『汝、クラウドよ。汝は転生することを望むか？』

性別、年齢を感じさせない不思議な声がクラウドに問う。

「望む」

クラウドはその問いに短く答えた。

『汝は力を求めるか？』

「求める」

『汝は何故に力を求める？』

「強くなりたいからだ」

もしここでスカ○ロス○ト口等とふざけたことを言った者には激痛が走るようになっていく。クラウドのことだが。

『其れも又、真理へと続く路、汝、心せよ。汝は……となる』

不思議な光がクラウドを取り囲みその身体を強靱なかものへと変えていった……

『さらばだ。クラウド』

転生が終わると、再び不思議な光がクラウドを取り囲み、神殿の外へと送り出した……

戦いの幕開け（後書き）

急に一人称から三人称に変えてすみません。

次からは気をつけます。

さて今回はバトルがなかったので次は入れていこうと思います。
あとよければ感想よろしくお願いします。

戦いの幕開け2 (前書き)

すみません

投稿おそくなりました。

いよいよバトルですので、見てください。

戦いの幕開け2

「……………はあ」

クラスチェンジを終えたばかりのクラウドはもう何度目かわからない溜め息をついていた。

クラウドの溜め息の原因はその新しくなった職業にあった。

クラウドの今の格好は《魔剣士》の赤と黒を基調とした鎧ではなく、純粋な黒。金属の類は一切なく鎧と言うより、端がボロボロのコートのような格好で武器も剣から鎌に変わっていた。

《死神》それがクラウドの新しい職業の名だった。これを職業と呼んでいいのかは微妙なところだが。

クラウドが今まで見てきた中では攻撃力とスピード共に最高クラスを誇っており魔法も使用でき、特殊能力としてその名に相応しく相手を一撃死させるポイントを視る能力があり、まさしくゲーム界の直〇の魔眼である。

そこだけ見ればクラウドが溜め息なんかをつく要素は全くないのだが、《死神》には致命的と言っていいほどの弱点があった……

それは、HPが1しかなく、また防御力が皆無と言っていい程低く、転んだだけでも死亡してしまうという状態なのである。

「……………はあ」

再びクラウドの口から溜め息がこぼれ出る、先程は流石にこのままではいかないと、転生をやり直すため再びあの神殿に向かったのだが、どういうわけかあの後から神殿に入れなくなっていたのだ。

「こんな状態でどうやって代表戦に勝てというんだよ……」

結局あれからクラウドはなにも解決策を見つけれずに代表戦当日となってしまったのだ……

代表戦は闘技場で開かれる。代表の決め方として5ブロックに別れてのトーナメント形式で行われ、上位1位、2位の者が代表に選ばれるのである。

ちなみにクラウドはなんだかんだいいながら3ブロックに出場している。

闘技場の中は見物客で賑わっておりその間を今日は稼ぎ時ばかり商人プレイヤーがビールっぽい飲み物やポップコーンらしきもの売り歩いている。先程その中にホリイが見えたのは気のせいではあるまい。

「……帰ろうかな」

そう言ったクラウドは言葉通り回れ右をするとすたこら歩き出そうとする。が……

「あら、クラウドさん来てたんですか」

「うっ」

クラウドを呼び止めたのは茶髪の女性プレイヤーだった。見た目は紙を背中まで伸ばしており、顔は美人に分類される。他はご想像にお任せする。

「や、やあし、イサ久しぶり……」

レイサ、それが彼女の名前だった。またクラウドが苦手とする女性だった。

「ほんとですよ、だってクラウドさんちっとも連絡くれませんし私が連絡しても返事しないんですから」

「……すつすまん、なにぶんちょっと忙しかったから」

ここ最近忙しかったのは嘘ではない。何せHP1の《死神》の使いこなすためずっと迷宮にこもってたのである。

「あら、そうでしたのこれはすいません、私てつきりクラウドさんに嫌われてると思っていました」

(嫌いじゃなくて苦手なんだよ)

「それで、レイサも代表戦に出場するの？俺は3ブロックに出場することになってるけど」

心の中でぼやきながら、クラウドはレイサに尋ねる。

「はい、私は1ブロックに出場する予定です。お互い頑張りましょ

う！」

そう言うとレイカはクラウドに手を振ると自分の控え室へと向かっていった。

「……ふう、あいつと同じブロックじゃなくてよかった。そういやあいつ俺の格好見てもなにも言わなかったな」

首をかしげながら再び帰る気にもなれず、クラウドもまた自分の控え室へと向かっていった……

ちなみにレイカの職業は《狂戦士》である。

一回戦が始まりようやくとばかりクラウドの順番が回ってきた。

対戦相手は髭がもつさりした鉄球を持ったおっさんである。男の名前なんて興味ない。

試合開始がされお互いのHPが表示されると同時に会場がざわめく。

ザワ　　ザワ　　ザワ

(まっ、1しかないから当然か)

対戦者のおっさんもまた……

「ガハッハッよくそんな状態で出場する気になったな。そんなんで俺様に勝てると思うのか！」

一瞬クラウスのHPに驚いたようだが、自分が優位と知ると余裕の態度をとり始める。

しかし、クラウスは相手にせず新しく相棒となった鎌を構える。

クラウスの様子に髭のおっさんも自分の得物を構えるがその顔は早くも勝利を確信した顔だった。

そして早速とどめとばかりに鉄球を投げつけるが、クラウスはこれを右に軽く跳ぶだけで避ける。

「むっ」

クラウスの動きに髭のおっさんも真剣な顔つきになり鎖を使って鉄球を手元に戻すと再度クラウスに向けて先程より速く投げつける。

「ふっ」

しかし、これもクラウスは横に飛ぶだけで鉄球を避けた。

髭のおっさんもいよいよ本気とばかり自分を軸にして回転する。

ダンシングボマー 重打撃攻撃技

しかしその時にはもう勝負はついていた……

「ぐっ身体が動かぬっ！」

髭のおっさんは回転しようとする微妙な体制で固まっていた。

クラビィティーハインド
上位重力魔法それがこの技の名だった。

「おっさん俺からのアドバイスだがどんな相手でも油断するものじやねえよ。あと喋りすぎだ」

そういいながら近づき鎌を髭のおっさんの首にかける。

「おっおのれ、HP1の分際で！」

「ああ確かに俺のHPは1だが……《死神》は不死身だ」

そう言つと同時に鎌で首を跳ねた……

飛んでつた首は粉々に砕け残っていた胴体も同様跡形もなく消えた。今頃敗者が送られるであろう部屋にいるだろう。

1回戦、勝者クラウド

歓声を背にクラウドは控え室に戻つた……

その頃、隣のフィールドでは、

「くたばれやー！」

レイサが相手を真つ二つにしていた。

戦いの幕開け2（後書き）

最近ようやく色々な色々と伸びています。なので次も頑張ります。

戦いの幕開け3 (前書き)

毎回見てくれてる人はすみません。

最近忙しかったため投稿が遅れました。

とりあえず今回少ないですが投稿します。

戦いの幕開け3

その後もクラウスはすべての試合をノーダメージで勝利という荒業をやつてのけ、あつという間に準決勝へと駒を進めていた。

「なあ、あんちゃんよお、ちょいわざと負けてくれないかな？」

「はっ？」

それが対戦相手の第一声だった。見た目はいかにも「自分、武士です。真面目です。武士道貫きます」的な感じなのだ。

「今まで戦つた奴等はさ、ちゃんとわざと負けてくれたんだよねえ、だからさ、てめえもさあ痛い目に会いたくなったらさあ降参し……グハツ!!」

しゃべり方がうざく最後まで聞く気にもなれなかったクラウスは相手が最後までいうまえに侍ヤンキーの首を情け無用で切り落とした。

「……はあ、あんたにこのゲームをやる資格はねえよ」

既に聞くための部位がない相手にそう言い残すとクラウスはこれ以上侍ヤンキーを視界に入れたくないとばかりに早々と控え室に戻つた……

そして、決勝 相手は驚くことに一人の少女だった。クラウスより少し背が低く背中まである真っ白な髪、そして何より彼女は異様だった……

彼女からはここまで勝ち続けたという喜びや相手を倒そうという闘気、または殺意等のあらゆる感情を感じなかった。そう一言で言うならば“人形”のように感じた。

そんな相手と戦うことになったクラウドは当然ながら困惑しまた恐怖した。少女の動きが全く読めず、こちらから動くことがとても危険に感じたのである。

全く動けない状況の中まるでクラウドの心の動揺を見透かしたかのように、少女がゆっくりと歩を進めてきた。

まだ武器すら構えてもない少女が近づいてくるだけなのにクラウドは指一本動かさなかった。

(くそっ動けよ俺っ！動けよ！動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け……)

「動けええええええっつ！！」

少女に対する恐怖を打ち払うかのように叫ぶと、鎌を水平に構え猛然と突進しながら剣技を発動させる。

デス・フェル・スクエア

上位水平斬撃技

《死神》の力を音速に匹敵する斬撃は吸いこまれるようめにして少女の首に決まると思われたが……

ガシッ

しかし、少女はその必殺の一撃をクラウドよりも速くそして、なにも使わずに片手だけを使い白羽取りをやったのけた。

「なっ！」

クラウドは数々のキャリアを持つプレイヤーだが今まで自分の必殺とも言える一撃を白羽取りましてや片手だけで受け止められたことなど当然あるはずがなかった。

そして、驚愕と技の硬直時間という決定的ともいえる隙を少女が逃すはずもなく少女が放った蹴りはクラウドのたった1のHPを一瞬で全損させた。

3ブロック優勝者、「ニーナ」

(ニーナっていつのか……)

消え行く意識の中、クラウドはニーナの名を頭に刻み付けると同時に敗者として控え室へと強制的に送られた……

その後すべての試合が終わり結果、代表戦に出ることとなったのはクラウドの知っている中では、ブラン、レイサ、自分、そして自分を倒したあのニーナとなった。

代表戦まであと一週間……

戦いの幕開け3（後書き）

読んで頂いた方短くてすみません。

次話をもっと長くしますのでよろしくお願ひします。

死神、弟子をとる（前書き）

今回も遅きながらも投稿しました。

死神、弟子をとる

あれから1日が経ったはずなのにクラウスの心は未だに晴れていなかった。

その原因は当然ながら昨日戦った少女　ニーナに対して一撃も与えられずに無様に負けた自分自身への怒りだった。

「……やっぱりHPとDFを上げなきゃいけないよな」

代表戦まであと6日間、その間ずっと地下迷宮に潜ってステータス上げをしていようかと本気で考えていた時……

「あ、あの……ちょっといいですか？」

「はい？」

後ろを振り向くと目の前には初期装備に身を包んだ自分より小柄な少女が顔を真っ赤にしながら立っていた。

「ええっと、私アカネって言います。私このゲームやるの初めてなんですけど、迷惑でなければレクチャーしてくれませんか!？」

ほぼ叫ぶようにして頼み事をしてくる少女　アカネは当然のように周りから注目され、またその視線はあたりまえのようにクラウスにも向けられた。

「えっ! いやいやいやちょっと待って待ってつまり君はこのゲームが初めてだから俺にレクチャーしてほしいと?」

「ハイッ！」

数秒前までとは違って変わって元気に返事をする。がクラウドにとってはあまり嬉しくない申し出だった。

(何でよりもよって俺に言っただよ)

口には出さなかったが、正直迷惑であった。また代表戦があるため断ろうと思ったが

(さてよ今ここで断ったら完全に俺いやな奴じゃないか?)

二人だけだったらどうとでもできたが、周りには多くの人がありしかもアカネが大声を出したため今は完全に注目されていた。

「あの……やっぱり迷惑でしたか？」

なにも言わないクラウドにアカネは瞳を潤ませて尋ねてくる。

「あ、え、う、ええっと俺なんかで良ければいいけど……」

「本当ですか！ありがとうございます！」

最終的にクラウドはきっぱりと断ることが出来ずにOKを出してしまいアカネの方は満面の笑みを浮かべていた。

「まあ短い間になるだろうけどよろしく俺はクラウドだ」

そう言いながら右手で握手を求める。一度引き受けたからには全

力でこなす、それがクラウドのモットーである。

「こちらこそよろしく申し上げます“師匠”」

アカネもそれに両手で応じると縦にブンブンと振る。

「師匠？」

「はいッ、クラウドさんは今日から私の師匠です」

クラウドはそれに、

(……………いや、なんか、弟子ってちょっといいかも……………)

まんざらでもないようだった。

「んじゃ、とりあえず地下迷宮行くか」

クラウドによる、第一回基礎講義が今始まるのだった。

その後、場所は移り地下迷宮に

「やあああああ!!来ないください」

地下一階層で早速エンカウントしたのは中年の親父の顔をした犬^{コボルト}で、強さは最弱ともいってよかったのだが、見た目があまりにひどいため嫌悪感より先に殺意が浮かぶほどのものだか、アカネには生理的に駄目らしく戦う気でクラウドの後ろに隠れてしまう。

しかし《コボルト》はクラウスなんか始めから存在しないかのよう
に「ハイハイ」と言いながら寄って来ようとしたが、見ているだ
けのつもりだったが、逆にクラウスの方が苛々とし始め結局止めを
指したのはクラウスだった。

「すみません師匠私が不甲斐ないばかりにい〜」

アカネは土下座してもおかしくない勢いで何度も頭を下げてる。

「気にするなゆっくり慣れていけばいいんだから」

その言葉にアカネは、

「ありがとうございます。私感激です」

感動の涙を流していた。

「それじゃも一回やるか！」

「はいっ」

「そっいやアカネお前なんか聞こえないか？」

「何がですか？」

そっ言ってきよとんと首をかしげる。

「いや、やっぱ何でもない、気にするな」

「はぁー、そうですか」

アカネにはそう言ったが実は先程からクラウドスの耳にはあの時の声が聞こえていた。前と同じ言葉をずっと言われ続けているのである。

しかし驚いたことにアカネには聞こえておらず、まるで

(俺を呼んでいるみたいじゃないか)

1人の時ならその声を追っていたがアカネの前と言うこともあり、クラウドスは謎の声を意識の外に飛ばしたのであった。

「それにしても師匠すごいです。私よりHP少ないのにというより1しかないのにあんな風に戦えるなんて、すごいです。天才です。神様です」

「……ああ、まあな」

誉められること事態に慣れていないクラウドスは照れくさそうにぽりぽりと頭を掻いた。

そう言い合っている間に二人は再び人面犬コボルトに遭遇した。

「ほら、頑張ってください」

「あわわわわわ！」

ほんと背中を押されたアカネは慌てながらも背中の剣を抜いて構える。

「逃げちゃだめです。逃げちゃだめです。逃げちゃだめです……」

使徒と戦う人と似た台詞だった気がするが、クラウドはそれを黙殺した。というより触れなくなかった。

「アカネ行きまーす！」

また同種の台詞がでた気がするが無視。アカネは剣を手に突進するが、あまりに直線すぎた攻撃はあっさりと避けられる。

「うう……もう一回です……」

しかしアカネは懲りずに再び突っ込むがこれも避けられるその次もその次も次も次も……

「はあ……はあ……全然……当たら……ない……です」

攻撃を繰り返すうちにアカネは肩で息をしはじめちよくちよくと反撃を食らったためHPは半分以上減っていた。

「おい！一回肩の力を抜け、敵の動きに注目しろ」

アカネの背中にそう呼び掛けるとアカネは一度深く息を吸ってはくと再び剣を構える。

「そう……それでいい」

自分にだけ聞こえる声で呟くクラウドは今のアカネを信じている顔をしていた。

「ふう……………やああっ!!」

「ひい……………」

ライト・ブレイク
片手剣基本技が《コボルト》の動きに合わせて見事ヒットしそのHPを0にまで持っていった。

「ふう……………やりました!私やれましたよ。師匠」

魔力結晶も拾うことも忘れて満面の笑みで嬉しさのあまりかクラウドに抱きついてくる。

「あ、ああ、よくやった」

抱き返す訳にもいかず、行きどころのない手を仕方なくアカネの頭に乗せる。

「えへへ」

クラウドの対応が少し不満だったようだが、嬉しそうに微笑んだ。

「よしっ、じゃあこの調子で次行くか」

アカネの体を離して言うと、

「もう無理ですううう」

案の定、弱音をはいたのだった……………

闇の中僅かな明かりしかない部屋。過去、最強の者達が集った部屋である。

中心にある円卓には1つの影もなく他の者の影がなかった。

「もう少し……もう少しで奴を潰せる」

それはあの時のフードの男だった。

rank二位《劍聖》のシリウス

「クッククッククッククック……」

暗闇に笑い声が響いた……

死神、弟子をとる（後書き）

最近よく書いている途中寝落ちしてしまいます作者です。
次回はクラウスの前にあいつが……
的な感じですのでよろしくです。

戦いの始まり（前書き）

自分で言うのもなんですが投稿する時間がすごい不規則ですね。直していいと思うのですが、しばらくは無理そうです。

戦いの始まり

3日、4日と時間が過ぎアカネはクラウスが驚く早さで成長しゆき今では地下50階層でも普通に戦えるまでとなっていた。

「なあアカネ、お前何時になつたら俺から離れるんだ」

始めの頃はアカネが初心者というのもあり仕方なくやっていた節があるが、

今アカネはそこらのルーキーより数段上の力を持っている。

なのに未だクラウスの傍にいるのはどういふわけであろう。それがクラウスには分からなかった。

「だって……そしたらクラウスさんと一緒に……とにかく私はまだまだ未熟者ですから私が納得するまでご指導お願いしますよ」

最初の方はよく聞こえなかったが要は自分が納得できるまでやりたらしい。

「と言つてもなあ、俺もあと3日であるんだよ“あれが”」

“あれ”とは無論、代表戦のことである。アカネの指導が終わればいつもレベル上げをしているのだが、やはり時間が少なすぎるため現在1レベルも上がっていないかった。

「それなら私も行きます！その代表戦に」

「無理だよあれは選ばれた奴しか出られないようになってるんだ」

「むう、ほんとに駄目ですか？」

「つつ！駄目なものは駄目だ！」

上目遣いで見上げてくるアカネに一瞬OKと言いつつになったクラウスだが、なんとかそれを堪える。

「じゃあせめて見ているだけでもいいですから連れてってください」

「んー連れてくぐらいなら……まあいいかな」

「ほんとですか！師匠大好きです」

「なっ！……いや別にそんなぐらいい何でもねえよ……」

けしてそんな意味ではないだろうにクラウスは顔を真っ赤にしながらもすぐさま余裕の態度に戻ろうとする。

しかしクラウスはこの後、アカネを連れて行き後悔することになった……

「はあっ！？！一人飛び入り可だと！」

代表戦当日　クラウスは受付で慌てていた。

代表戦が行われるのは5つの都市

迷宮都市ラグナロク

カナリア

サイハード

ティグレス

バーミリア

の中心にある普段はとある者たちしか入れない場所。

ちなみにクラウドはカナリアに属している。

《ファイナル・アリーナ》強き者のみが立ち入ることを許される場。

そんな神聖ともいえる場所に1人につき1人飛び入りさせるとは
どういうことなのだろうか。

「キラキラ！キラキラ！」

後ろではアカネの期待に満ちた視線を感じるが、取り敢えず気付かないふりをして再度受付に尋ねる。

「何で急にそんなルールを、前やったときは飛び入り可能ななんてしなかつただろ！」

珍しく怒気をはらませた声で受付に詰め寄る。

「確かに前回はありませんでしたが《十柱》の人が決めたことです

から」

しかし、受付はあくまで冷静にクラウドの問いに返答する。

「くそっ！ああもおお分かった。分かりましたよ。出してやるから後ろ！そのキラキラした視線で俺を見るな」

振り向かずに言うと案の定、

「やったー!？」

と喜ぶ声を聞きながら、受付を済ませると。

「だ〜〜はっはっはっはっは〜。さすが我が好敵手来ていたか、貴様と俺様がいれば優勝したも同然だな」

「やっぱり、クラウドさんも来ていましたか。一緒にに戦えるなんて滅多にありませんから」

2人組の男女　ブランとレイサも到着したようである。

2人の他にも今回出るプレイヤーが集まってきていた。

「あ、あの師匠こちらの2人は……」

いつの間にかクラウドの後ろに隠れていたアカネがおずおずと聞いてくる。

「むっ!」「あら?」

2人も初めてアカネの存在に気づいた。

「そういや、お前ら初対面同士だったな、いい機会だ。こいつは俺の……教え子みたいなものかな……で、こっちの暑苦しい男がブラン、その隣がレイサだ」

そこは代表してクラウドがみんなの紹介する。

「それは珍しいですね、クラウドさんが他人に教えるなんて」

「確かにそうだな貴様は代表戦の時ぐらいじゃないと組まなかったじゃないか」

2人は驚いたように目を見開き、珍しそうにクラウドとアカネを見る。

「あ、あの、ええっとすみません」

アカネはその視線を悪い意味と取ったのかぺこぺこ頭を下げる。

「いえ、別に悪くはないですよ、ただクラウドさんが誰かと組むなんてそれも指導までしてるので驚いてしまっただけです」

そこをレイサが慌て止めた。

「ところでクラウドさんそちらのアカネさんも代表戦に？」

「ああ、何故か急に飛び入りOKって言うからな、こいつがしつこいから仕方なくだよ。それでお前らは誰かだすのか？」

そう言ってくれる仲間をクラウドは頼もしく感じた。

戦いの始まり（後書き）

いよいよ半分いったところでは。

次回から色々起こります。

お楽しみに。

戦いの始まり2 (前書き)

言い訳せずに言いました。

遅くてすみませんでした (全力土下座)

とりあえず投稿しました。

戦いの始まり2

その建物の中には観客席もなければ戦士のための控え室もなかった。

しかし何も無いわけではない。

建物の中央には大きく開けた場所がありまたその中心には大きな石舞台が存在した。

それは戦う為だけにある場所……

それは強者のみが立つことができる場所……

その中にクラウドをはじめとする総勢50人以上のプレイヤーが石舞台の前に集っていた。

そして突然石舞台の上に1人の男が現れた。

まるで初めからそこにいたかのように、誰1人その男の出現に気づけなかった。

しかし、その男は誰もが知っていた。そしてそれは誰もが一度は憧れる存在だった。

rank1位《剣帝》のシヴァ

だがその姿はクラウドとさほど変わらない歳をした少年だった。

「ああ、聴け〜諸君、今回は俺様が直々に来てやったからありがとう
〜思え〜」

シヴァは聞いているこちらの方が疲れそうな声で話した。

「そして今回は特別に優勝者のチームには、俺への挑戦権が与えられる〜勿論1人でも全員でもよし。何故だど？それは当然そっちの方が面白いからに決まってるだろう」

そんなことは誰も聞いてないのだが、以上と言つとシヴァは来たときと同様にいつの間にか消えていた。

『……試合の説明は！？』

言いたいことだけ言ったシヴァにそれぞれ不平を抱きながら、毎回出場しているものが、率先して周りに試合の説明を語った。

それを分かりやすく言つと 試合をリーグ戦形式で行い。一番勝率が多いチームが優勝する。また試合中はアイテムと蘇生魔法が禁止される。勝利の有無は最後まで自分のチームの誰かが生き残つていれば勝ちである。

「あの〜、師匠。ちょっと私、場違いな気がしまして今から帰ろっかな〜なんて」

場の空気に堪えられなくなったのかアカネが逃げ腰になる。

そして呼ばれた本人は額に手を置いて溜め息をついた。

「お前なあ、自分から言い出したくせに今更帰るはないぞ」

「で、でも」

それでもなお食い下がろうとするがクラウドの態度で無駄と悟ったのか、「う」言いながらもおとなしくなった。

そんなこんなで早速試合は始まり、チーム《カナリア》（クラウドがいるチーム）は初めチーム《ラグナロク》との対戦となった。

「な〜はっはっはっは〜。まさか好敵手の貴様と共に戦う日が来るとはな、まっ、貴様は後ろで見ているんだな」

「お、言ったな。じゃあどちらが多く倒せるか勝負だな」

お互い軽口を叩き合うが試合が始まると2人はレイサやアカネ等プレイヤーを置き去りにし敵チームへと突進した。

『うおおおおお！』

その時の2人の勢いは凄まじかった。2人が武器を振るえばたちまち相手を吹き飛ばしその後ろを追い付いたアカネ達はその範囲を広める。

完全に浮き足だった敵はなすすべなく、クラウド達に狩られた。

ちなみに2人の勝負の結果はクラウドが4人、ブランは2人でクラウドの勝ちだった。

その後もクラウド達の勢いは止まらず、最後のチーム《バーミリア》には苦戦はしたもののリーグ戦で全勝利を納めた。

パチ パチ パチ

やる気のない拍手と共にいつの間に現れたのかシヴァはクラウス達の前に立っていた。

「やゝご苦労、ご苦労、なかなかよかったじゃないかでは早速俺と」
「それより先に私達の相手をしてもらいましょうか」

シヴァの言葉を遮るように現れたのは9人の集団だった。

その集団はrank1位の《剣帝》同様に有名な者達だった。

rank2位《剣聖》のシリウス 男 得物・剣

rank3位《竜騎士》のバベル 男 得物・槍 盾

rank4位《賢者》のターラ 女 得物・杖

rank5位《大將軍》のワンフー 男 得物・斧

rank6位《狩人》のルイン 女 得物・弓

rank7位《HERO》のカエル 男 得物・素手

rank8位《怪盗》のシド 男 得物・ナイフ

rank9位《砦》のアニス 男 得物・盾

rank10位《聖導魔導師》のデイク 男 得物・剣

この世界で最強の《十柱》が奇跡的にもこの場に集っていた。

「久しぶりぶりですね、剣帝。貴方ならもう気づいていらっしやるでしょうこの状況を！」

シリウスは一步前に出ると周りを気にせずシヴァに向かって問いかけた。

「んっ？ああ、よう、シリウス2、3週間ぶりだな他の奴等もひさしぶり！」

問いかけられた本人は今の状況に気づいておらず突然の乱入に気を悪くした様子もなく普通に挨拶をする。

「くっ！いいでしょう貴方のその態度、後悔させてあげます」

シヴァの態度に顔をひきつらせながらも余裕のたいどを保ち続け、シリウスの声と共に後ろに控えていた《十柱》の者達がそれぞれ各々の武器を構える。

「ああなるほど、そういうことな、ようは全員でかかればいくら俺様相手でも勝てると思ったわけな、確かにお前ら全員はさすがに無理だな」

「クッククク……ようやく理解しましたか。もう貴方の時代は終わりなんですよ……行けっ！」

シリウスの声と共に一斉にシヴァへと襲いかかる。

「相手してやりたいのは山々なんだけど今は先約があるから、だから……」

シヴァは高速でウィンドウを呼び出すと素早く操作した。

「これで終わってくれ」

そう言った瞬間それは起こった。

『がつ！？』

それは今まさにシヴァに襲いかかるうとしていた《十柱》の口から漏れた声だった。

当然その中にはrank2位のシリウスも含まれておりシヴァを除く《十柱》全員が不自然な格好で固まり、呻き声を上げている。

「剣聖……貴様！何をした！」

先程までは勝利を確信していたシリウスの笑みも今は怒り顔を赤くして憎々しげに睨む。

「これか？rank1位の特権つてやつだ。お前等のような考えを持つ奴等の動きを止めることができる。まっ使うのは初めとなんだがな……そしてこれで仕上げと」

「貴様を必ずその座から引きずり落とす……」

シリウスの言葉は最後までその耳に入らなかった。なぜならその時にはシリウスを初めとする《十柱》のプレイヤー達は消えていた

(確かに、そうかもな)

クラウドは軽く笑みをこぼすと……

「俺もやるぞ!」

全員の参加を確認したシヴァはニヤリと満足げに頷く。

「よし、では始めようか、俺様を本気で倒すなら全員死ぬ気でかかってこい!」

戦いの始まり2（後書き）

自分の頭の泉が枯れそうです。

潤いがほしいです。近々このアルファーが完結したら別の作品を書こうと思います。

それはともかく今回とうとう《十柱》全員出てきましたが一瞬で退場しました。

今度いつ出すかは分かりませんがrank1位以外は基本的に出ないと考えてください。

それでは次回予告、

今回はクラウド達と剣帝シヴァが正面对決、勝負の行方のあとには

……

対峙する力（前書き）

毎回の事ながら不規則すみません。

対峙する力

シヴァの一言に我先にとばかり6人のプレイヤーが猛然と斬りかかった。

6人の敵を前にしてもシヴァの余裕の笑みを浮かべ構えるどころか剣すら抜いていなかった。

6つもの刃がその身体を誰もが貫いたかに見えたが……

まさに一瞬、武器が触れるか触れないかのところ霞のようにシヴァが消えた。

「がっ!」「ぐはっ」「うっ!」「あっ」「げふっ」「

突然の対象の消失に6人のプレイヤーは同士討ちになった。

「……………上だ!」

クラウスの声で一斉に上を見上げるとそこには確かにシヴァがおりその手には既に黄金に輝く剣が握られていた。

メテオ・ストライク
片手剣上位剣技

技を発動させると同時にシヴァの身体を紅い光が覆い隕石のごとく先程己に斬りかかってきた6人の集団に向けて落下する。

ぶつかると同時に凄まじい衝撃と砂煙が走り少し遠くにいたクラウスにさえも衝撃の反動が来る。

く構える。

「そうですね、折角ここまで来たのですから存分に……殺らせてもらおうぞー！」

ブランに続くようにレイサも戦闘モードに変わり腰の刀を抜いて吠える。

「もう、どうとでもなれ！です」

アカネも半分投げやりになりながらも己の剣を抜いて構える。

「……………」

ニーナも無言で背中から長さの違う2本の剣を抜き取る。

「行くぜ剣帝！てめえの首を刈らせてもらおう！」

そう言ってクラウドも背中から鎌を取り出して肩に担ぐようにして構え、シヴァへ向けて突っ込む。

それを合図に戦いの幕が落ちた。

「先行かせてもらおうぞ」

レイサは《狂戦士》のスピードを活かしクラウドを抜くとシヴァへ向けて上段に降り下ろす。

それをシヴァは無駄のない動きで横に避けると隙だらけの横側から剣を突き入れようとするが……

「チエストー！」

レイサの隙を埋めるようにそこをブランが掛け声と共に斬りかかる。

それをシヴァは余裕の笑みを浮かべたまま空いた左手で背中からもう一本の黄金の剣を取出すとリブランの大剣を軽々といなし、同時に右手の剣でレイサに突き入れる。

が、そこを割ってはいるようにニーナがから空きのシヴァの身体に斬りかかる。

「おっ、やるねえ」

シヴァの反応はそれだけで今まさに迫ろうとしている剣を左足一本で弾き返した。

「!!!!!!!!!!」

これには流石にニーナも驚いたらしくその顔に初めて驚愕が浮かぶ。

だがその間にブラン、レイサは一度距離を取る隙ができニーナを入れた3人は後ろに下がる。

「今のはなかなか良い連携だったぞ。だが俺様にはまだ及ばないかな」

確かにその通りである。3人の連携攻撃は結果、ダメージ1つ与

えられず、シヴァを1歩も動かしていなかった。

「ちょっといいか、ここは一回だけ俺1人でやらせてくれないか…
…」

途中で止まって戦いを見ていたクラウスが無謀ともいえる事を言
い出す。

「なに馬鹿なことを言っている我が好敵手そんなこと無理に決まっ
ている」

「ブランさんの言う通りですここは一緒に戦うべきです」

「……私に負けた貴方じゃ……無理……」

「いくら師匠でもそんなこと駄目です」

「そろそろ仲間の言うことは聞いとけ少年。1人で倒せるほど俺様
は甘くねえぞ」

当たり前のように全員が口々に反対するがクラウスは断固として
引かなかった。

「勝算があるのか？我が好敵手」

他を代表したようにブランが聞いてくる。

「当然」

「そうかなら行って来いそして勝て、貴様を倒すのは俺だからな」

クラウドの短い答えにブランはやれやれと首を振りながらもニカッと笑うと拳を突き出す。

それに答えるとクラウドはシヴァへと向き直る。

「待たせたな剣帝」

「結局お前1人で来るのか、後悔しても知らねえぞ」

「後悔はしない。今回は本気を出すんだからな、行くぜ……限定解除！」

そう言った瞬間クラウドの周りをどす黒いオーラが覆った。

限定解除 あの日、クラスチェンジしたあの日から備わった力、一度使った時はその能力に驚愕したが、その強さから一度も使わなかった力である。

「なるほどそういうことが」

クラウドのオーラに危険を感じたシヴァは余裕の笑みを消しここに来て初めて剣の構えをとった。

「はああああああっっ!!」

「らああああああっっ!!」

お互いの武器が激突しスパークが走るが拮抗は一瞬で、圧倒的にクラウドが圧していた。

だがシヴァも押されながらも片方の剣を使ってクラウドを襲う。それでが当たれば終わるはずだった。なにせクラウドのHPは1しかないのだから。

しかし、それをクラウドは一瞥しただけ、迫り来る剣を避けるわけでもなければ弾き返すわけでもなかった。

必殺の剣は確実にクラウドの身体を捉えた……

だが

「チッ！まじかよ」

シヴァは舌打ちをしながら後ろに距離を取る。

何故なら目の前には変わらずクラウドが立っているのだから。シヴァの攻撃を受ければどんな相手でもほぼ一撃で倒せるが目の前にいるのはHP1のカスである筈なのに自分の一撃を受けて立っているのはあり得ないことだった。

「まさか！不死能力か！」

「……かもな……」

シヴァの問いかけにクラウドはそれだけ言うと、再度斬りかかる。

シヴァの言ったことは間違っていないかった。だがこれには制限時間があり5分間しか持たなかった。現在はあと3分である。

「そうか……なら俺様も本気を出さないとな……」

迫り来る鎌をかるうじて迎撃しながらシヴァは呟いた。

「……………限定解除」

その瞬間シヴァの身体を黄金の光が包み圧されていた状況が拮抗する。

お互い相手押すようにして下がる。

「さあここからが本番だ！言っとくが俺様のこれは制限時間がないそして全てのステータスを上げる」

強大な力 《剣帝》と《死神》が改めて全ての能力を使い激突する……

対峙する力（後書き）

いよいよ盛り上がってまいりました。

なんかごつちやになった感ありますが気にせず書きます。

それでは毎回恒例次回予告

己の全てを賭けて戦う2人その先に待つものは新たな頂点の誕生
か……

決着（前書き）

とにかく無理矢理ひねり出して書きました。
毎回の事ながら遅くてすみません。

決着

あれは丁度2年前の出来事である。

まだrank1位が《剣帝》ではなく《破壊王》というプレイヤーだった時の出来事……

彼は《アルファ》が発売されて3日後にrank1位へとの上がり、未だその地位に君臨し続けていた。

そんな彼には1人の弟子がいた。使う武器は師が大刀で弟子が双剣と全く違っていたが、師弟関係に問題もなく2人は上手く行っていた。

そんなある日、弟子が地下迷宮に単身で潜っていたときである。

弟子は1つの双剣を手に入れた。《ゴールドノルナ》それがその武器の名だった。

その日を境に弟子はものすごい早さでlevelを上げ職業を《剣帝》へと変えた。

その次の日弟子は《破壊王》にデュエルを挑んだ。

今まで弟子にも負けたことない《破壊王》はその挑戦を何も問題なく承諾した。

2人の戦いは熾烈を極めたが最後まで立っていたのは師ではなく弟子の方だった。

その日から弟子はrank1位となったが師の姿を再び見ることはなかった。

そして弟子は気付いた自分が何をしたのかを彼がどうなったのかを気付いてしまった。その後、彼が負けることは一度もなかった……

前にも同じようなことがあった気がする。お互いが全力を出しあい、死力と言つていいほどの状態で戦い続けるこの戦いを。

その相手がHP1なのには少なからず驚いたが、その力の前にその感情は消し飛んだ。

これ迄戦ってきた相手よりも強く荒々しい相手に今久しぶりと言つていいほど自分の心が踊っているのが分かる。

だから手加減はしない、始めから全力で相手に答える。

「うおおおおーっ!!」「」

2人の男が咆哮しそれぞれの黄金の光と漆黒の光の密度が上がっていく。

クラウドはここで決めなければ制限時間を迎え、勝機を失う。

だがシヴァはこれを凌げば勝利するがrank1位のプライドで正面から受けて立とうとしていた。

2人が飛び出すのは同時だった。技も魔法も小細工もない己の身一つでぶつかっていく。

交差したのは一瞬、止まると同時にクラウドの周りを覆っていた漆黒の光が消え、その手には先の無い鎌の柄だけが握られていた。

片方は未だ黄金の光が包んでいたがその胸には鎌の刃の部分が刺さり、そのHPバーに0と表示される。

「ふっ……あゝあ負けちった。これで終わりか、ほんと残念だよ」

「？」

言葉の意味が分からずに首を傾げるクラウドにシヴァは言葉を続ける。

「これで俺様もこの世界から退場か……情けねえな、だが悔いはねえ、そしてこれは俺様からの忠告だ。rank1位になったからには負けることは許されない。負けはこの世界からの永久退場を意味する」

「それってどういう意味だ？」

「そのまんまの意味さどうせすぐ分かることになる」

問いに答えながら次第に薄くなっていく身体でシヴァは話続けた。

「そしてこれはただのゲームじゃない。ゲームでありながら現実でもある。この謎が知りたかったら最下層に行きな、俺様ですらたど

り着けなかったところまで」

「……最下層」

既にシヴァの身体は首から上までしかなくその最後の部位も透けかかっていた。

「行けば分かるはずだ。まあ頑張れお前の後ろにいる仲間と共に……」

それを最後に《剣帝》シヴァは完全に消えた。

それを合図に後ろで2人の戦いを見ていた皆が駆け寄ってくる。

「やりましたね！クラウドさん」

始めにレイサが興奮したように声を掛けて来る。

「は~~~~はっはっはっは~~~~。さすが我が好敵手、しかし1位になったからといって貴様などすぐ追い抜いてやるわ~~~~!!」

「凄いです師匠。私、師匠の弟子で幸せしゅ。あまりの嬉ししやに涙が止まりましたえ〜ん」

ブランも負け惜しみを言いながらもクラウドを褒め称え、アカネは号泣しながら抱きつく。

ニーナは他の皆からは一歩離れた所に居たがその顔は僅かに微笑んでいたがクラウドの視線に気付くと若干頬を赤く染めながら顔を背けて後ろを向いてしまった。

そんな仲間達に囲まれ嬉しく思いながらもクラウドの思考はシヴアが言った事に向いていた。

(最下層の秘密、俺を呼ぶ声……… いったいなんだ………)

今この世界で一人の男が消え、その男の地位に新たな者がついた。

決着（後書き）

取り合えずこれで一章完結した感じですが。

無理矢理終わらせた感ありますがその辺はお許しください。

次は前から書くことかと思っていた話を書くつもりです。もちろんこの続きも書きますただししばらくの間は書かないと思いますのでそこはすみません。

変化する世界（前書き）

この話を書くのは久しぶりですので、おかしな所がないか心配になります。

が、どうぞお楽しみください。

変化する世界

気付けばあの戦いから一月が過ぎていた。だからといって特に変わったことはない。強いて言えば、この世界の頂点が変わったことくらいだろう。それは大きな変化だが、《剣帝》が消えたことも一時期騒がれたが、「下の奴に負けたから逃げたのだろう」と簡単に片付けられた。

そして、現在のrank1位のクラウドは今日も迷宮攻略に明け暮れていた。

「らああっ!」

気合いの声と共に目の前に広がる炎を両断すると同時に、前へと飛び出る。

正面には180階層に出現する。炎魔神 《フレイム・エンペラ―》が再びその拳から紅蓮の炎を放出する。

だが、クラウドは関係無いとばかりに正面から炎へと突っ込んでいく。あの日からレベル498から626へと驚異的速度で上がっていたが、ついにHPだけは上がることはなかった。つまり現在もHP1であり、掠めるだけでもアウトなのだ。

炎に飲み込まれる瞬間、クラウドは呟いた。

限定解除

はたして炎魔神からはどう見えただろうか、自分で作り出した炎

は確かに 相手を飲み込んだはずなのに、その中から死んだと思っていた相手が平然でてきたら、硬直した敵に向けクラウドは大鎌を炎魔神の首に向け振るった。

胴体だけ残った炎魔神が消滅すると同時に赤い結晶が落ち、EX Pが流れ込んでくると体から力が抜け後ろに倒れそうになる。がそうならなかった。

「あわわわ！師匠。大丈夫ですか！？」

倒れかけた彼を支えたのは、一人の少女だった。例の如く、クラウドの弟子のアカネである。もう教えることは何一つないのだが、アカネ曰く「弟子は師匠を越えるまでが弟子なんです」だそうだ。

「あ、ああ、大丈夫だ。すまん」

アカネの手を借りながら、自分の足で立つクラウドにもう一つの人物が歩み寄ってくる。

「お、そっちも丁度終わったか、大丈夫だったか？」

「問題ない」

答えたのアカネではなくもう一人の人物。ニーナである。どういうわけか、《剣帝》を倒したあの日を境に、ニーナはクラウドに付いて回るようになっていた。最初は突き放していたのだが、先にクラウドが折れて、こうしてなし崩しにパーティーを組むことになっていた。

「じゃあ、今度こそ帰るか」

今度こそというのは、少し前に、アカネが踏むことによつて発動する罠を踏んだのが原因だった。この罠は、そこだけ黒ずんでいるので普通は引つ掛からない類いのもののだが、それに何故か引つ掛かり通路を挟むように魔物が出てきて今の状況というわけだ。

魔力結晶を拾い上げポーチに突っ込むと、クラウド達は脱出用の転送装置へと向かった……

《アルファ》が発売されてから三年、クラウドは《剣帝》を倒した日から、妙な違和感を感じていた。いや、その違和感の正体には既に気づいていた。

小さなことだが、近頃、ルーキーの姿が見当たらない。そのぐらゐならまだ分かるとして、一番の問題は、プレイヤー全員がこの《アルファ》をゲームとして認識していないことだった。

おかしいことだが、この一ヶ月、ログアウトしているプレイヤーを見ていない。クラウド自身もしていない。否、出来ない。ログアウトを押しても、反応がないのだ。この事を教えたアカネやブランはそれが当然といった態度である。

そう、全員がこの世界を一つの世界として生活していた。今の状態に疑問を持たず、この世界に囚われていたのだった。

迷宮を抜けたクラウドはその足で馴染みの店へと向かった。

言わずとも知れた、何でも屋のホリイである。当然彼女もこの世界の変化に気づいていない一人である。

「ヒューヒュー、流石はrank1位どの両手に花とはよい身分に

なつたもので」

ホリイの皮肉に苦笑で返すと、ポーチから今回手にいれたアイテムをカウンターのうへへと並べる。

「これ、全部換金してくれ」

「はいはい、あんた最近お金貯めてるみたいだけど、マイホームでも買う気？」

「ん〜、まあ、そうなんだけど」

言葉を濁すクラウスを不審に思いながらも、ホリイは作業へと移った。

確かにホリイの言う通り、クラウスはマイホームを買う気でいた。今まで、は、宿で事足りていたのだが、そうせざるえない理由が出来たのだ。その原因が今現在もクラウスの後ろに立っている二人である。

また、一番の原因である。ニーナは必要以上にクラウスにくつつき、最終的には寝る時も離れないのである。そして、それを知ったアカネは、「師匠を守るためです」と言っアアカネまで、入ってくる始末なのだ。

当然、三人も入れれば、部屋はきつつきつで女の子が二人もいる空間では満足に睡眠も取れない、ということ、クラウスは広い家を買つたため、現在、必死にお金を稼いでいるのである。

(だが、その生活も今日までだ)

手持ちのアイテム全てを売りさばき、毎日、迷宮に潜る日々。その努力がようやく実る。とうとうこの換金した分を合わせれば目標額に届くのだ。

「はい全部で七万セル」

「お、サンキュー」

渡されたものを受け取ると、一目散に駆け出す。

「あ、師匠待ってください」

「……………」

その後を二人が追いかけるが、今のクラウドに追い付ける者は誰もいなかった。

変化する世界（後書き）

どうでしたでしょうか？

最近は別の作品を書いていたので、自分でもどうい話だったのか忘れていました。

今回の次回予告は決めていないので省略をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269t/>

アルファー

2011年7月26日00時51分発行